深頸部膿瘍治療に対してNIM（Nerve Integrity Monitor）の使用が有用であった一例

横田　誠　鈴木元彦　伊地知圭　村上信五
名古屋市立大学 医学部 耳鼻咽喉科

【はじめに】抗菌薬の発達した現代においても深頸部膿瘍は時に死亡例も報告される疾患であり，外科的治療を含めた早急かつ適切な治療が必要となる．また，膿瘍に対する外科的アプローチ法は様々であるが，手術の際神経損傷に気をつける必要がある．今回私たちはNIM（Nerve Integrity Monitor）を用いて神経学的合併症を回避し，切開排膿術を行う事ができた症例を経験したので報告する．

【症　例】症例は65歳男性．2010年5月下旬より右上顎部痛を認め，近医歯科にて右上顎歯を抜歯，その後開口障害を認めたため当院神経内科へ紹介された．受診時，右頬部の著明な腫脹と広範な発赤を認め，血液検査ではWBC15300，CRP14.02と高度の炎症が示唆された．6月8日施行の造影CTでは右咀嚼筋間隙を中心に耳下腺間隙，頸動脈間隙に広がる周囲が造影される内部一様の病変を認めた．同日より当科へ紹介され入院として抗菌薬MEPM投与を開始するも炎症の軽減乏しく，6月13日NIMを使用して顔面神経と舌下神経を同定した後，右顎下部からの頸部横切開による深頸部膿瘍の切開排膿を行った．術後，顔面神経麻痺および舌下神経麻痺を認めていない．

【考　察】歯性感染症を契機に深頸部膿瘍を認めた症例を経験したが，NIMの使用により神経学的合併症を回避し切開排膿を施行することができた．深頸部膿瘍に対してNIMの使用は有用な方法と考えられた．